

旧制高等学校記念館 第22回 夏期教育セミナー

日付 2017年08月19日(土)

時間 14:00~17:00

場所 あがたの森 講堂ホール

(遠藤館長)

定刻となりました、ただいまから第22回夏期教育セミナーを開催いたします。わたくしは開会式の進行をさせていただきます旧制高等学校記念館の遠藤でございます。宜しく願いいたします。はじめに主催者である松本市を代表して矢久保教育部長からご挨拶を申し上げます。

(矢久保部長)

みなさんこんにちは。教育部長の矢久保学でございます。本日、教育長の赤羽郁夫の出席が叶いませんでしたので、第22回夏期教育セミナーの開催にあたり、松本市を代表して、ごあいさつを申し上げます。暦のうえでは立秋を迎えましたが、いまだ残暑が厳しい中、全国からご参加をいただきました皆様に、心から歓迎と感謝を申し上げます。

松本市は、美しく豊かな自然環境に恵まれ、松本城を中心に城下町として栄えた歴史や伝統文化を育んできました今では、三つの「ガク都」を標榜しています。三ガク都とは山岳観光都市としての「岳都」、セイジ・オザワ松本フェスティバルに代表される音楽の「楽都」、そして、わが国で最も古い小学校の一つとされる開智学校や、本日の会場になっております、旧制松本高等学校などがあり、教育を重んずる学びの「学都」です。

松本市教育委員会では、教育振興基本計画に「学都松本」のまちづくりと位置づけ、学び続けるまち「学都松本」を目指して、様々な取組みを進めております本セミナーの開催では、自由な校風のもと恵まれた学校生活や緊密な人間関係の中で、幅広い教養を身につけ、自己の可能性を広げることができた個性豊かな人間形成の場であったといわれる旧制高校の教育を見つめ直し、学びによるまちづくりの一層の前進に繋がることを期待しております。

さて、今回のセミナーは、「たしなみの教養」といわれた女学生の教養について学ぶことを通して、旧制高校の教育を見つめ直すという観点から、「女学生」をテーマとし、この後、京都大学教授の稲垣 恭子(いながき・きょうこ)先生からご講演いただくほか、記念イベントとして旧制松本高等女学校(現:松本蟻ヶ崎高校)の卒業生の皆さんから、女学校の様子や女学生文化等についてのお話を伺います。さらに、明日の研究発表会では、難波 知子(なんば ともこ)さんをはじめ、3名の研究者の皆さんから研究成果について発表をいただけることとなっております。講師、発表者の皆様には、大変お忙しい中お引き受けいただき、厚くお礼申し上げます。

結びに、このセミナーの開催にあたりまして、旧制高等学校記念館友の会をはじめ、多くの皆様にご尽力をいただきましたことに感謝いたしますと共に、有意義な二日間となりますようご祈念申しあげ、あいさつとさせていただきます。(拍手)

(遠藤)

ありがとうございました。続きまして同じく主催者でございます旧制高等学校記念館友の会、松村会長からごあいさつを申し上げます。

(松村会長)

旧制高等学校記念館友の会会長の松村好雄です。第22回夏期教育セミナーの開催にあたり、

友の会を代表して、一言ごあいさつを申し上げます。

夏も終わりと申しながらまだまだ暑い日が続いている中、全国からご参加をいただきました皆様に、心から歓迎と感謝を申し上げます。

旧制高等学校記念館と友の会は、旧制高等学校の教育理念や文化を見つめ直し、現在・未来の日本教育に活かしていくことを、活動理念のひとつとしております。

本セミナーは、その活動のなかでも、お集まりいただいた研究者の皆さま・参加者の皆さまが共に考え、学ぶことができる貴重な場であると考えております。皆さまがそれぞれの立場で、教育について考えるきっかけとなることを願っております。

さて、今回のセミナーでは「女学生」をテーマとし、京都大学教授の稲垣 恭子先生からご講演いただくほか、記念イベントとして旧制松本高等女学校（現在の松本蟻ヶ崎高校）卒業生のみなさんから、お話を伺います。

さらに、明日の研究発表会では、3名の研究者の皆さんから発表をいただけると聞いております。

講師、発表者の皆さんには、大変お忙しい中お引き受けいただき、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

結びに、このセミナーの開催にあたりまして、多くの皆さまのご尽力を頂きましたことに感謝いたしますと共に、有意義な二日間となりますようご祈念申しあげ、あいさつとさせていただきます。

（遠藤）

有難う御座いました、それでは講演にはいる前に、本日お配りした資料がお手元にあるかどうか確認をさせて下さい。まず最初に旧制高等学校夏期セミナー開催要項があります。その次に本日の基調講演の稲垣先生の資料で「男子の教養・女子の教養—旧制高校と女学校—」の5、6枚の資料。そのあと新聞のコピーが2枚。それからあしたの難波先生の資料が「制服をめぐる女学生文化—かたち・ルール・着こなし・制作の男女比較—」それから明日の発表の土田先生の資料で「旧制中学校と高等女学校にみる模範生徒像—県立和歌山中学校と県立和歌山高等女学校の事例から—」それから佐藤先生の「はいからさんとバンカラ君—不滅の女子力と衰退する男性文化—」最後に記念館だより47号もし入っていないければ近くの職員のほうへ申し出て下さい。

では今日の日程について説明させていただきます。最初に言いました第22回夏期教育セミナー開催要項をご覧下さい。本日はこれから稲垣先生の基調講演「男子の教養・女子の教養—旧制高校と女学校—」あとに旧制松本女学校卒業生のみなさんのおはなしなど総括質疑などを含めて5時半ころまでの予定しております。その後希望されている方で6時50分まで懇親会を行いたいとおもっております。会場は燦祥館ここから徒歩10分位のところになっています。

本日の日程は以上です。次にお手洗いです、先ほど入って来たところか外に出てください。赤いれんがの建物、旧制高等学校記念館の中、外にもトイレがございますので、そちらの方をご利用下さい。また記念館1Fギャラリーで「旧制高校と東京帝国大学という企画展」がおこなっております。この企画展に関しましては入場無料でございます。ぜひご覧いただきたいと思っております。それから本日お配りしました紙袋の中に松本市内の博物館の優待券などはいっておりますので、ぜひご活用いただきまして博物館等ご覧いただければと思います。

それでは本日の司会をご紹介させていただきたいと思っております。旧制高等学校資料当セミナーの

世話人を務めていただいております近畿大学の富岡勝先生と東京理科大学金澤冬樹先生です。それでは宜しく願いいたします。

(富岡)

では司会を務めさせていただきます。宜しく願いいたします。基調講演をしていただきます稲垣先生の紹介をまずさせて下さい。稲垣先生は京都大学の大学院で学んだあと現在京都大学大学院教育学研究科教授また今年度から研究科長をされています。

専門分野は教育社会学、近年は女性の教養と師弟関係・歴史社会学等いろんな分野の研究をおこなっています。また今回のテーマの女学校と女学生となり、中公新書より出ています。またここにあります著作もされています。

では稲垣先生宜しく願いいたします。

(稲垣先生)

みなさんこんにちは。今ご紹介いただきました稲垣でございます。どうぞよろしく願いいたします。

わたしは今日、朝早く比叡山からまいりました。わたくしの所属しております教育社会学は、みなさんもお存じだとおもいますが、竹内洋先生の門下の方や歴史社会学のセミナーで富岡さんとも長い付き合いがありますが、わたし自身は22年間開かれているこのセミナーに、今回はじめて参加させていただきました。今回は、今日明日と両日かけて、旧制高校生ではなく女学生の文化と教養を男子の教養を通して透かして見る、すこしちがう観点から見るという試みをしたと考えています。今日はこのあと本物の女学生の方においでいただいているリアルな話も伺えますし、明日はまた3人の先生方からいろんな発表が聞けるということで、私も楽しみにしています。

ちょっと横道へそれますが念のために申し上げますと、わたくしは旧制ではなく新制の高等学校を、そして女学校ではなく大学を出ていますので、女学生としては偽物でございます。男子の教養、女子の教養と大きなタイトルになっていますが、話題提供ということで、すこし具体的な話から始めさせていただきます。女学生文化を扱う人が若い研究者の中からも最近出てきたこともあり、また、わたし自身は朝ドラの研究をはじめたこともありまして、朝ドラにはいくつかタッチしていますが、その中に数年前にNHKドラマで放送された「八重の桜」という、結構人気があった番組があります。主人公は新島八重という女性ですが、会津藩の武士の娘で幕末から明治にかけて活躍し、同志社大学創設者の新島襄と結婚してつくしたそうです。新島八重を演じたのは女優の綾瀬はるかさんで、そのキャラクターがすごく人気があったのですが、現在の女性の目にも明治の女性の生き方がハンサムウーマンとして映って新鮮だと評判がよかったそうです。そのほかにもアント、ひまわりなど女学生が登場して、その人気で視聴率も上がることもありまして、もちろんドラマですから現実の女学生とはだいぶ違っているところも多いわけですが、女学生という存在のイメージや生き方には、現在の女性にも訴える魅力があるのだろうかと思われと思います。

教諭というと旧制高校的な教師を思い浮かべることが多いと思いますが、教養といえば、哲学・思想書の読書を通じて人生を思索するという旧制高校的な教養主義を思い浮かべることが多いと思いますが、現在ではこうした男子の教養主義の系譜はだんだんと影が薄くなりつつあるように思います。学生文化のなかでもマイナー化して、そういう学生は「勉強おたく」とか「哲学おたく」(京

大では「いか京」という目でみられることになっています。京大せいのためにフォローしますと、かっこいい京大生もたくさんいます。

それに対し、女子の教養は主流派とはみなされていなかったにもかかわらず、現在でもその水脈は引き継がれているところがあるのではないかと思います。今日は、教養文化の主流であった男子の教養と、女学生文化に代表される女子の教養の違いを感じられるような形で紹介していきます。女学生の文化が現代においてどういう点で魅力的に映るのかを、いまこそ考えるきっかけになればと思います。

まず、男子の教養について話させていただきたいと思います。先ほど申しましたように、一般に男子の教養というと、旧制高校文化からはじまる読書文化を中心とする文化、人文的教養などを思い浮かべることができます。その中でも、特に旧制第一高等学校の文化であるといわれております。思想、哲学を通して読書から人生を考えるということかというと、当時デカンショ節というのがありました。ここに来ている方はご存知だとおもいますが、デカンショとは、デカルト、カント、ショウペンハウエル読んで半年、後の半年は寝て暮らすという学生文化を揶揄した歌ですが、ここから読書を中心とした学生文化が大いに理解されると思います。実際、読書調査でも出てくるのは阿部次郎の『三太郎の日記』ですとか、西田幾多郎の『善の研究』、倉田百三の『出家とその弟子』など、岩波書店から出版される本や西洋古典を中心とする幅広い教養書でした。今は本の点数が多いので中身をあらためてから買うことが多いですし、それが普通のことですが、当時は出れば中身を見ないですべて買うようなものだったようです。

読書をとおして人生を思うというのが大正期に始まる教養主義ですが、教養主義をささえたのは読書だけではなかったであろうと思います。先生との直接的な関係のなかで、学問に対する敬意やあこがれというものが伝わっていった面も大きいと思います。すなわち師弟関係というのがありまして、今日はその師弟関係の面から話題提供をしていこうとおもいます。写真もありますが、西田幾多郎の講義の様子を少し例として紹介します。

西田さんの『善の研究』というのは教養主義のバイブルと言われた本のひとつですが、講義も名物講義として非常に有名でした。京都帝国大学在職中には、毎週土曜日の午後に特殊講義という形で開講されていたのですが、この授業には文科の学生だけではなくて卒業生や他の学科の学生も聞きに来て、階段教室がいつも満席の状態で見学が出るというほどの講義だったようです。講義の様子はどうであったかということ、大抵は2時間くらいの授業ですが、西田は30分くらい遅れて入ってくる。着物姿の出で立ちで、教壇の上を行ったり来たりしながら、ほとんどは下を向いてぼつぼつと低い声で話すという講義の仕方だったようです。不意に立ち止まって黒板に円を描いて説明する。ときには急にだまりこんで、教壇の上で考え込んでいるわけですね。沈黙の時間が何分も流れるということもあったようです。かと思うと我を忘れたように一気に話す。ブレーキを踏んで、一気にアクセルを踏むような授業であったそうで、眼鏡越しに遠くを見たり、話が一段落したりして、急に終わりという。2時間の講義ですが、その日は疲れていて30分遅れてきて1時間早く終わる、というようなこともしばしばあるような講義だったようです。

この講義を受けた人たちの中には、5、6年間にわたって講義を受けた人もけっこうたくさんいます。例えば、弟子のひとりである西谷啓治は、大正10年に京都帝大哲学科に入学してこの講義をずっと受けていましたが、先生の講義はまとまった講義ではなかったと言っています。論理的に順を追って話を積み上げて全体を理解してもらおうというやり方ではなかった。三木清は5

年間講義に出席していますが、西田の講義は、人に話すというよりは自分で自分の考えをその場でまとめるかなり独特な講義だったようで、そのように回想しています。

あらかじめ準備したテーマについて論理的に説明していくような一般的な講義と比べてみますと、かなり独特な講義スタイルだったようです。聞いている方も、ノートを取ろうと思っても何を取ったらいいかわからない。終わった後、今日はどういう講義だったのか教えてくださいと人に言われても簡単には説明できないし、もらさず聞いていても根本までわかったかと言われるとあまりわかった気がしない。にもかかわらず、講義を聞いていた人は、何かすごいことを得たという気持ちになって大満足で教室を後にする。ほとんどの人はそうだったようです。簡潔でわかりやすく聴衆を飽きさせないことが重視される現在の授業とは全く逆の、決して解りやすくはない講義に多くの受講者が惹きつけられたのはなぜだったのか。三木清は、西田先生の講義は悪戦苦闘しながら自分の考えている哲学を自分自身で生みだしていくプロセスそのものを講義のなかで直接見せるものだった、と言っています。その中に惹きこまれていくことによって、西田先生がものを見たり、考えたりするしかたに少しずつ近づいていけるような気がしてくる。いわば西田の思考の舞台裏に入っていく、それがだんだんとまとまっていくプロセスそのものに自分をシンクロさせていくような気持ちになっていく。講義を聴いていて簡単に理解できるということよりも、なかなか到達できないような学問の深みに惹きこまれていく体験の魅力が大きかったのではないかと言っています。そこまでいなくても、西田先生の講義に出ていると、講義内容は十分に理解できなくても、その独自の哲学を作っていく姿勢と迫力ぐらいは伝わったと言っている人が多いです。評論家の唐木順三は、非常に辛口の評論で有名ですが、この講義を受講していて講義の内容はほとんどわからなかったと言わざるを得ないけれども、それでも十分だったと書いています。話している先生の姿から何かが発射されてくるという理解ですね。そういう人が眼前にいて自分たちに話しかけてくれている、そういう経験するだけで十分だったと大絶賛して手放しで褒めています。

そういうふうによくの人が西田先生に惹きつけられていったのは、その哲学や思想の内容だけではなく、それに向かう姿勢や生き方まで含めた全体的な魅力だっただろうと、回想などからわかるわけです。ですから、西田先生という呼び方は、ただ学問や知識を教えてくれる教授、西田教授という呼び方とは若干距離がある。講義に来ていた人が、直接の弟子ではないけれども西田先生という言い方をして呼びかける。存在それ自体への敬意というものを伴っているという意味で、教授という役職ではなく、生き方も含めた師という存在だということがうかがえます。師が見ているものを同じように見ること、自分もその世界に近づいていきたい、学問から生活までを含めた全体を師として尊敬する、そういう感情的な思い入れを伴ったトータルな関係が、一般的に「原型」としての師弟関係と呼ばれていると理解しています。

西田幾多郎に限らず、旧制高校や大学などの高等教育の時代に出会った先生は、人生全体の中で大きな意味をもっていることが多いようです。ではどういう教師が影響力を持ったのかを考えていきます。日経新聞で1956年から現在まで連載されている「私の履歴書」というコーナーがございまして、各界のリーダーの人たちが順番に、大体1か月にわたって、自分の生まれた時から現在までの履歴を書いていきます。ここに1956年から2008年までに書かれたものをもとにして、自分が習った先生、あるいは本などで接した研究者や学者などを先生と見なして、一人の人が1か月の記述全体の中で自分の先生について思い出を書いている部分がどれだけあるか、どれ

くらいの分量を先生の思い出の記述に充てているか、その分量を計算してみました。その中で、研究者、学者の人たちに限定して、旧制高校、大学、専門学校等の高等教育時代の先生について記述している箇所を抜き出して、先生と本人の専門の関係で分類して相関を見たものが表1です。人文系、法・経済系、医学系、理系の4つの専門領域について、自分と同じ専門の先生と異なる専門の先生のそれぞれとの関係を示しています。どの領域でも、本人の専門と同じ専門領域の先生の思い出がほとんどを占めているのがわかります。専門領域の直接の先生との関係が、研究者の人生にとって大きいというのは当然のことです。なかでも、人文系の領域では95%以上が同じ人文系の先生の思い出で占められています。その中には大学時代の先生だけではなくて、旧制高校の先生も含まれています。ただ、法・経済系や医学系、理系の場合には、専門領域以外に人文系の先生の思い出が結構語られているのが面白いところです。

表1. 先生の専門領域との関係（専門職）

専門領域	同職						計	先生数	N
	同領域	他領域				計			
		人文系	法・経済系	医学系	理系				
人文系	95.3	—	0.4	—	4.3	4.7	100.0	10.5	19
法・経済系	71.2	23.1	—	—	5.7	28.8	100.0	8.3	12
医学系	76.2	13.1	1.5	—	9.2	23.8	100.0	10.7	15
理系	85.5	8.5	1.6	4.4	0.0	14.5	100.0	8.0	22
計	83.5	9.9	1.0	1.5	4.2	16.5	100.0	9.3	68

この人文系の先生の多くは、実は旧制高校時代の先生です。たとえば、二高の名物教授と言われた栗野健次郎先生。いつも昼間からお酒を飲んで赤ら顔をしていて、本は全く書かない。なぜ書かないのかと聞かれると、「ゲーテや、ワイルドじゃあるまいし、後世に残らない本を書いても紙の無駄だ」と言って書かなかったという先生です。また、第八高等学校の岡部次郎はカーライルの研究をしていましたが、カーライルの本の原文は全部暗記しているから本は一切持ってこないで、暗記したものを頭の中で「何ページの」といってそのまま話すような先生だった。

このように個性的な教師も登場します。なかでも、一高の名物教授と言われた岩元禎については、授業を受けた人たちも「私の履歴書」に出てきた人も必ず言及しています。ご存じだと思いますが、岩元禎は明治32年に一高の教師になって、昭和16年に退官するまでの42年間にわたってドイツ語と哲学概論を教えていた先生です。その風貌や生活スタイル、独特の講義の仕方などが非常に強い印象を学生に与えていたことでも有名です。「私の履歴書」の中でも研究者、財界人を問わず、11人の人がその思い出についてかなり詳しく語っています。

いろいろなエピソードが出てきます。例えば、岩本は独身だったので下宿をしまして、学生が先生の下宿を訪ねて行くと、自分の気に入った学生だと「さあ上がれ」と言って2階まで上げて、自分が作った牛鍋をふるまうというかわいがりようでしたが、一方で自分が気に入らない学生が訪ねて来ると、大きな声で2階から「岩元は留守じゃ、帰れ」と言って追い返していた。よく気に入られていた学生に魚住影雄や九鬼周造がいます。かわいい学生とかわいくない学生とは非常に態度が違っていたといえます。

授業もかなり独特で、教科書に書き込みすることを厳しく禁じていました。先人が心血を注い

で作った書物に、学生ごときが下線などを引っ張るのは不遜であるといつて、線を引くと非常に激昂し学生から教科書を奪って破くほどで、しかしその代わりに新しいものを後で本人に返す、ということをしていたそうです。それから、点が厳しいことも誰もが共通して指摘していることで、哲学者の和辻哲郎がドイツ語の試験で赤点 55 点をつけられたというのは非常に有名です。和辻の説明では「自分が岩元先生と違う訳を述べたから」だということです。中村敬之進も第 1 学期の哲学の試験で落第点である 30 点をつけられて、皆の前で「中村君 30 点」と大きな声で言われたと本に書いています。理由を恐る恐る尋ねたら、「お前たちのような小僧が生意気にも自分の言葉で書くな」と言って 30 点をつけたと言われた。そこで後日、答案を日本語で書くと赤点を付けられるのでドイツ語で書いて合格点をもらった、と書いています。

岩元禎は、明治 2 年に鹿児島県の士族の長男として生まれて、第一高等中学を経て、明治 27 年に帝国大学文科大学の哲学科を卒業した、いわばエリート予備軍だったのです。にもかかわらず、当時まだ官僚になるには帝大を出れば試験も無くなれた時代に、その道をとらず、実業家としての成功も望まず、生涯独身のまま、西洋学問の奥まで分け入ろうとして、万卷の書に挑んで人生を全うした人です。学者肌ではあるけれども、栗野健次郎と同じく一冊の書物も自ら著すことをしなかった。そういう岩元のことを、学生たちは「危険でもって偉大なる暗闇」と言っています。「偉大なる暗闇」とは、よく知られていますように夏目漱石の『三四郎』に登場する広田先生のあだ名ですが、世間に非常に疎い広田先生のイメージが、岩元と生き写しだと当時一高の学生が言っていました。一方で東北帝大の学生は、栗野健次郎が偉大なる暗闇と言っていた。一つの旧制高校的な教師のイメージを代表するものだったと私は思います。

今からみるとずいぶん浮世離れした教師像なわけですがけれども、その奇人ぶりも含めて学生たちから非常に敬愛されていた。それは学問に対する真摯さや書物への没頭ぶりというのが醸し出す独特の風格のようなものによるものだったのだろうと、いろいろな人が回想しています。語学や哲学を教える先生というだけではなく、好奇心や功名心とは一線を画した態度が学生たちにとっては新鮮であり畏敬の念を感じさせるものだったということがエピソードからうかがえます。

しかし、このような師弟愛を媒体とした理想的な師弟関係というのは、旧制高校という、ある意味で現実とは若干距離をおいた特別な空間であるからこそ成立するものだったということも言えるだろうと思います。教師も学生も、将来の不安を感じる必要がないという暗黙の了解のもとに学問を存分に楽しむことができる。そういう時空間が旧制高校だった。そういう意味では、旧制高校の師弟関係は現実の師弟関係の多面的なものうちの美しい側面を典型的に強調するものだと思います。そういう経験を共有していたことが、卒業後にどの進路に進んで行っても、共通の教養や理想的な畏敬モデルとして共有されている。それが共通の経験として鎮座しているわけでありませう。

大学に入ると少し様相が変わってくることになります。大学に入ると、卒業後の就職という現実的な問題が射程に入ってきます。それが師弟関係においても少しずつ変化を示すことになってきます。そこで、帝大法科の例をとって、学問とパンと師弟の関係を紹介したいと思います。

帝大法科といいますと、戦前では官僚や財界人を多く輩出するエリート集団だったことは言うまでもないですが、夏目漱石の『こころ』にも書かれていますように、法科の講義、授業というのは旧制高校とは違ってあまり魅力的なものではなかったという回想が多いです。

明治 44 年に旧制一高から帝大法科に進学して、のちに帝大法科（商法）の教授になって文部

大臣も務めた田中耕太郎は、一高時代には岩元禎や新渡戸稲造の教えを直接に受けて、師と友と書物に非常に恵まれた高校時代を送ったけれども、それに比べて大学の専門講義は全然面白くなかったと回想しています。当時の教授陣には各分野の第一線の学者が並んでいた。一つの講義に700人位の学生が詰めかける。憲法や民法など大講義室で行われる授業は、席を取るだけでも容易ではなかった。いい席を取るために朝からグループの代表が席取りに行く。それは魅力があったわけではなく、専門教室で席を取るためだった。試験では、成績が相撲の番付のように最高点から最低点まで並べて掲示されて、それがまた就職の際にものをいう。だから皆、朝早くから席取りをしなくてはならなかったようです。

田中耕太郎も、大学というところはこんなにも世知辛くて殺風景なところなのかと思ったようです。しかし、もともと田中耕太郎は『こころ』の「私」とは違って、帝大の法科に進んだのは法律が好きだったからでも使命を感じたからでもなかったと正直に書いています。だから、もともと帝大法科に期待していなかった。文科や理科に特別に興味があって進学するのでなければ、法科に進むのが出世の道としてスタンダードであった時代ですから、大学に入るのはパンのための修業が始まることだと最初からわかっていた。だから『こころ』の「私」のように大学や教授に対して幻滅するというナイーブさはなく、田中同様に、そうしたことに適応する現実主義を多くの人がとったということです。

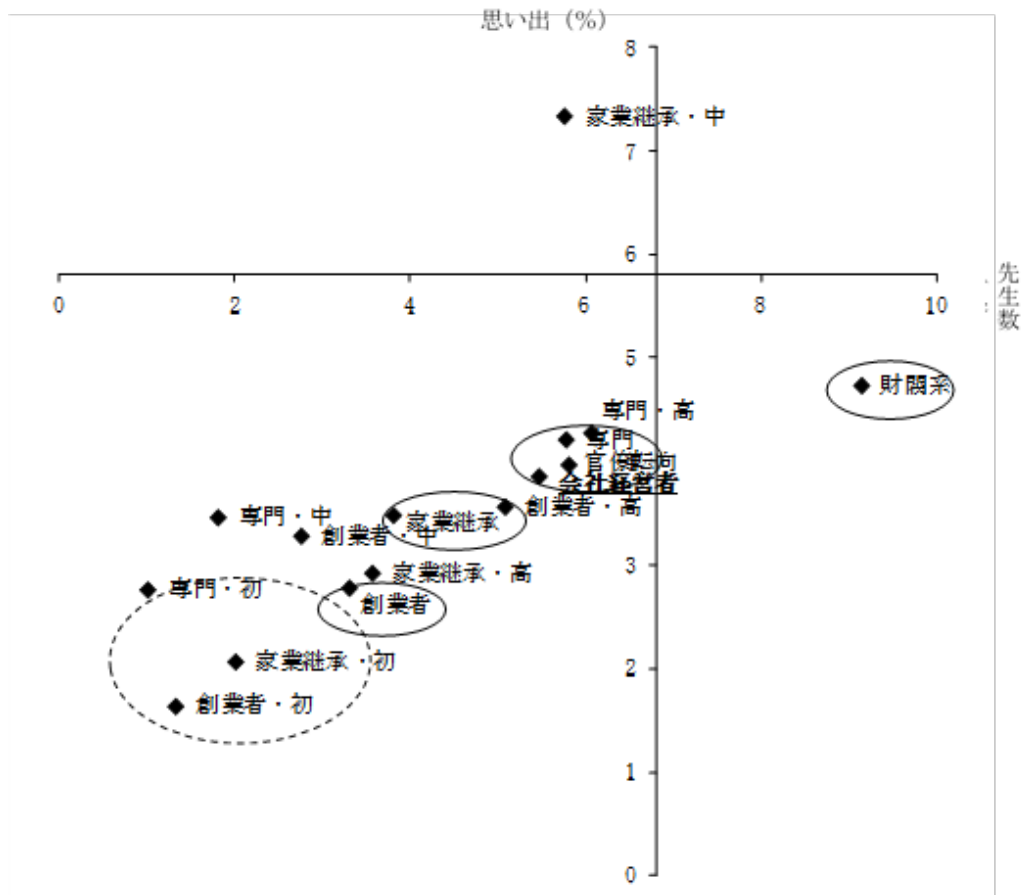
当時の帝大教授の典型的なキャリアは、卒業後そのまま大学に残って助教授になって、2、3年の外国留学をして帰国したら教授になるというコースです。そのルートに乗ったのは銀時計組、成績優秀者ですが、東京帝大の場合は明治大正をとおして教授の90%以上が東京帝大卒で占められており、ほとんど内部から調達されていました。

田中耕太郎も、帝大の銀時計組で卒業して指導教授の推薦で法学部の助教授に採用され3年間の留学をして、いわば代表的なエリートコースを歩んで行ったわけです。しかし、銀時計組だったら自動的にコースが必ずしも保障されているわけではなくて、たいていは現職の教授の眼鏡にかなった人が抜擢されることになっていたのです。田中耕太郎の場合は恩師である山田哲三郎の勧めで東大に戻って、主任教授の岡部貞次郎の尽力で松本教授の後を継いだ。3人の先生が係わってそのポストに就いたということです。3人の教授は恩師ですし、自分の直接の上司の松本の長女と結婚したという意味で、松本教授は自分の父親にもなるという関係になっていますから、師弟の関係も、明確な上下関係という側面もあると同時に、学識と将来性の評価の承認を与えられたことに対する恩義という感情的な上下の関係を含めた、パンと感情と師弟関係がセットになった独特の関係であったことがわかると思います。恩師の一人である岡野敬次郎は就職教授だったことで知られています。就職の時期になると岡野参りというのがあり、就職の口利きをしてくれるだけではなく、人生相談を受けたり結婚の世話もしたりしてくれたという学生も多くて、いろいろな面で学生とつながった関係であったことがわかります。単に資格取得や就職といったパンのための功利的な関係だけではなく、信頼といった感情的なきずなや上下の関係も生み出され、非常に強いきずなが作られていったということです。

こういう旧制高校や大学時代の先生や友人との関係は、卒業してからもかなり重要な意味があります。図1は、「私の履歴書」に登場する財界人と会社経営者による先生の思い出を、経営者タイプ別に分量を表したものです。経営者タイプとは、財閥系企業経営者、専門経営者、家業継承型経営者、創業者型経営者という4つのカテゴリーです。これを見ますと、先生についての話

題の多さと登場する先生の人数のいずれも一番少ないのが創業者型の経営者で、次が家業継承者型で、一方で専門経営者、財関係企業経営者では先生の話が多く、重要な位置を占めているのがはっきりとわかります。

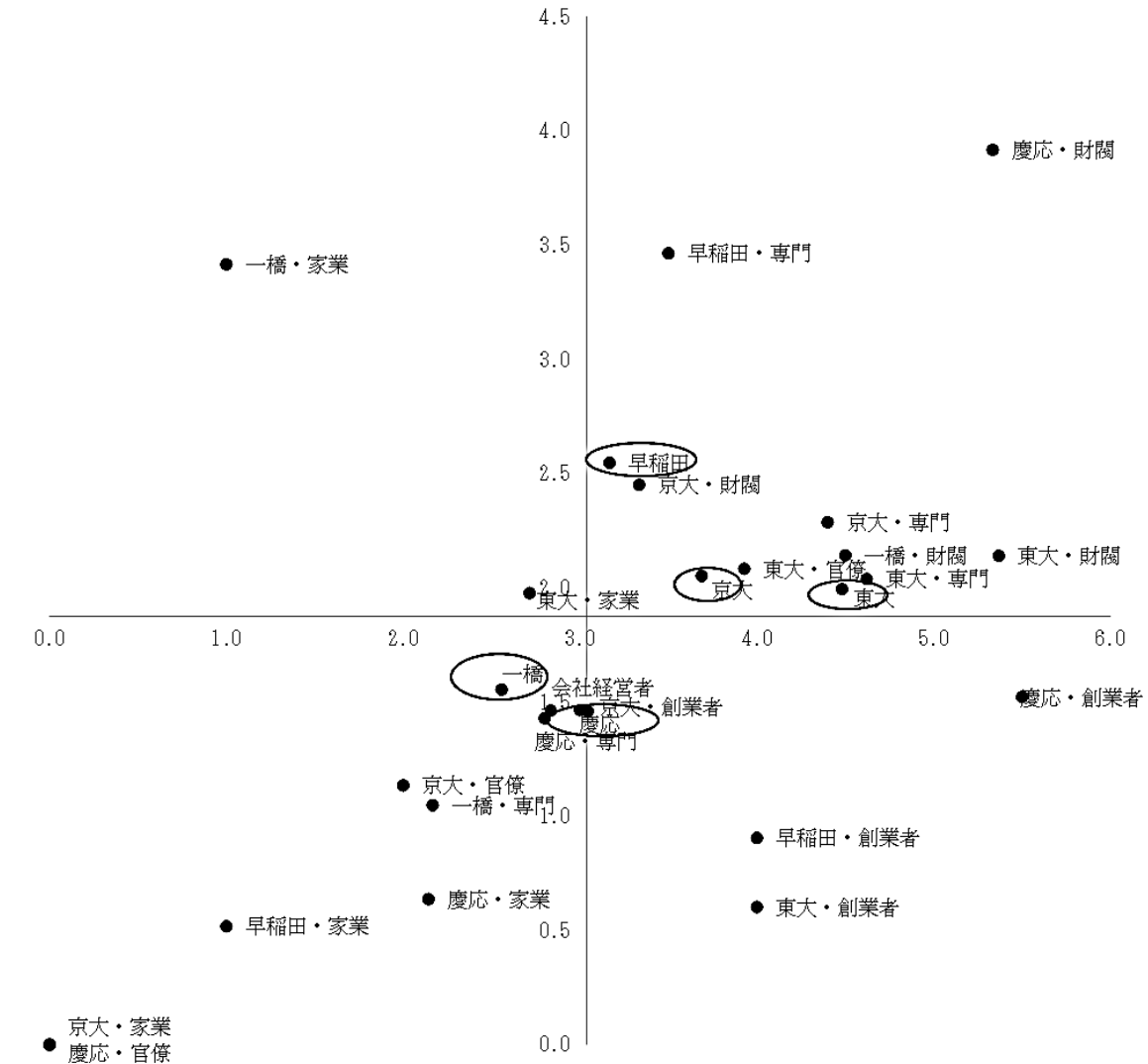
図1. 財界人の先生の思い出（経営者タイプ別）



実はこれは学歴とも対応しておりまして、創業者型には小学校、中学校卒の割合が多くて、そういう人たちの中には、「私の履歴書」の語りのなかで、先生が全く登場しないという人もいます。「私の履歴書」の連載の1か月間、自分の人生について語るなかで一人も先生が出てこない人が50名近くもいますが、その3分の2以上は創業者型経営者のタイプです。次に多い家業継承者型には、慶應などの私立出身者が多く、先生の話はあまり多くありません。専門経営者、財関係企業経営者になると多くが帝大卒で、とくに東京帝大の出身者が多く、そういう人たちにとって師弟関係は非常に重要だったことがわかります。

次の図2ですが、これは東大、京大、一橋、早稲田、慶應の5大学出身の会社経営者について、タイプ別に大学時代の先生の思い出における記述の傾向を示したものです。縦軸が先生の思い出の分量で、横軸が先生の数です。大学別で見ますと、先生の数が多いのが東大で、先生のはさほど多くないけれども分量が比較的多いのが早稲田で、その中間が京大であり、思い出の分量と先生の数がともに少ないのが一橋（東京高商）と慶應出身者ということになります。

図2. 会社経営者の高等教育時代の先生の思い出（大学・タイプ別）



まずは、人数も多い東大出身者による先生の語り方の傾向がどのようなものなのか、もう少し具体例とともに紹介していきたいと思います。執筆者の多くは、ほとんどが旧制高校出身者です。読書、スポーツ、友人関係などの学生生活と並んで先生との思い出も登場します。やはり特別な時空間だったことがその記述からよくわかります。大学時代になると、ゼミの先生との密接な師弟関係が結構語られている場合があります。たとえば、東京電力の社長だった木川田一隆や、日本郵船の会長をしていた菊池庄次郎、この人たちは河合栄次郎のゼミで、河合先生のことを師父と呼んでいました。人生の節目節目には河合栄次郎の言葉を思い出してそれを手掛かりにしているという話が出てきます。彼らにとって河合栄次郎という存在は、学問上の師というだけではなく、経済人・財界人として生きていく上でのモデルでもあったことがうかがえます。

大企業の経営者の自己モデルは、経済人だけではなく学者もモデルとして、理想主義や教養人の側面も重視していました。対して創業者タイプは、先生の存在よりも、自分自身が自らの信念と創意工夫によって人生を切り拓いてここまで来たということを最大限に強調する。ですから他者はずっと希薄になっていくような語りが特徴になっています。そういう意味では非常に対照的でおもしろいところです。より東大的な語り方では、一人の先生を師として語るよりも、ずらずらと有名な先生の名前を何十人も上げていくスタイルが結構多いです。特に、官僚転向型の企業

経営者にはその特徴が顕著に出ています。

こういう先生たちとの関係は、師弟関係という非常に密接で濃い関係というだけでなく、高等文官試験や就職に結びついたツールの意味もかなり強かった。ただ、それだけではなくて、綺羅星のような教授たちの講義を受けた経験は、財界人になってからも自らのアイデンティティーの一部になり、それが繋がり基になって社会関係資本に繋がっているという意味で、文化資本と社会関係資本がドッキングした独特の資本であるとわかります。

それと対比して、私立の慶應大出の場合を紹介します。慶應義塾大学の出身者の場合、先生についての思い出の分量も人数も両方とも少なく、おおむね先生という存在がさほど重要ではなかったことが全体としてわかります。ただ、先生の思い出は少ないけれども、大学生活や学生生活の思い出は非常に饒舌に語られています。「私の履歴書」に登場する慶應出身の著者のほとんどは、当時の理財科、現在の経済学部出身です。進学動機は、一部には東京高商の試験に落ちたからという人もいますが、ほとんどは家族や親族が慶應出身だから当たり前のように入ったという人が多いです。したがって、大学に対する帰属意識や親近感是非常に高い。そこで書かれている話題は、ボートやラグビーなどのスポーツや、ダンスホールのことなど楽しかった思い出が多く書かれています。同級生や上級生、下級生を含めた友人の話題も非常にたくさん登場します。それが後々の財界をリードする、社会関係資本に繋がっていくことがうかがえる。ですから、就職を決める場合も帝大とは違って、就職教授の世話になることはほとんどなくて、むしろクラブの先輩や親戚筋をとおして就職が決まるのがほとんどです。ただ、先生が登場してくるとすると、福沢諭吉と高橋誠一郎、小泉信三、この慶應義塾大学のシンボルというべき3人の先生は、語られるとしたらこの3人にだけにほぼ限定されるといえるほど頻繁に登場します。実際に教えてもらったかは別として、特別な師弟関係、敬愛の気持ちを学生が持っていた。表2は、当時の慶應の学生が敬愛する人物として学生調査で上げている人の一部ですが、圧倒的に小泉信三の人气が高かった。テニスをする姿がすごく格好良かったと挙げている人も多いですが、慶應らしさを体現するような先生だったことがわかります。先生が実質的にも象徴的にも重要な位置を占めていた東大とは対照的に、象徴として慶應ボーイ、慶應ネットワークをまとめるシンボルという位置づけがこの3人の先生にあったとわかります。

表2. 慶應義塾大学学生が敬愛する人物

	総数	パーセント
福澤諭吉	98	9.6
小泉信三	211	20.6
高橋誠一郎	64	6.3
林 毅睦	23	2.3
美濃部達吉	59	5.8
野口英世	33	3.2
徳富猪一郎	11	1.1
A. Einstein	10	1.0
河合栄次郎	9	0.9
本多光太郎	9	0.9
K. Marx	9	0.9
大学総長	46	4.5
その他又は不明	440	42.9
実数	1022	100.0

師弟関係の一部を事例的に紹介しましたが、こういう形で「私の履歴書」を見てみますと、1931年生まれ以降になると経営者タイプの違いによらず、先生の思い出というのはあまり語られなくなり、学生時代の思い出から読書の話が消えて、スポーツとレジャーの話が多くなったのと対応して先生の話も減っていきます。ですから、財界人のアイデンティティーにおいても教養というものがあまり重要な位置を占めなくなったことと、おそらく対応しているのではないかと思います。

まとめますと、男子の教養というのは、読書と師弟関係を軸としたエリート共同体の世界における男同士の絆、女性をその中に入れていないクロードでホモソーシャルな絆、こういうものによって支えられていた。しかし、それらは教養の衰退とともに徐々に消失していきつつあるのではないかと見ることもできると思います。

つぎに女学生の文化の話になります。女子の文化や教養は、ここで紹介しました男子の教養主義や師弟関係とはいかに違ってくるのかという話です。ご存じのとおり、概要的なことですが、公立の高等女学校ができるのは明治32年で、それ以前にも私立のキリスト系の女学校はありましたが、明治の時代には女学生は極めて少数でありました。地方では女学校があっても女学生を見たことがない人が結構多くて、私が調査をしていた滋賀県の北部地域のあたりですと、女学生とはどんな女性だろうと思って、登校時間に合わせて窓を少しだけ開けておいて登校する姿を見たという話もあります。女学生にはもともとが武士の家系の子女が多かったことや、明治の女性という近寄りがたいという印象もあったようで、ある作家の方は、女学生という言葉が聞いただけであまりの神々しさと自然と頭が下がってくる、下を向いてしまう感じだったと言っています。

新島八重や、中村屋の女主人であった相馬黒光も女学生でした。相馬は明治時代の気骨の女学生で、宮城女学校で女学校初のストライキに加担して、それで退学させられたというわけではありませんでしたが自主退学をして、明治女学校に入りなおすという経験をした人です。なぜスト

ライキをしたかということ、宮城女学校はキリスト系女学校で、アメリカと全く同じテキストを使ってアメリカ式の授業をしていたのですが、そうではなく日本では日本の、日本に向けた授業をしてほしいと要望した。そういうエピソードを持っている人物です。それから、杉本鉞子は長岡藩に生まれた人で、結婚してアメリカに渡ってから、『A Daughter of the SAMURAI (武士の娘)』という自伝を書いて、これがアメリカでベストセラーになりました。現在でも長岡ではすごく有名で、杉本鉞子を研究する研究会を女性だけで作って、アメリカまで行って彼女の動向をつぶさに調べてモデルにしている人たちもいます。明治時代には希少な存在でしたけれども、大正期以降になると徐々に女学生の数も増えていって、共通の文化というのが生まれてくることになります。いわゆる女学生スタイル、ファッションも現れてくるわけです。

では、女学生生活や趣味などの特徴を紹介します。まず、学科についてですが、何が一番好きだったかと調査したところ、国語が一番多く、国語好きが半数以上で、嫌いだった人はほとんどいません。その一方で、家事裁縫は女学校教育の柱でもありましたが、好きだったという人よりも、嫌いだったという人のほうが多かった。これには地域や学校の違いがありますが、好き嫌いが分かれるのが英語と家事裁縫の科目でした。英語はキリスト系の私立女学校や都市部では好きという人の割合が多くて、地方の公立女学校では苦手という人が多かった。関西の神戸女学院では、家事が好きだったという人は誰もいませんでした。地域差は結構出ます。

生徒のタイプや、学校の校風、地域などによって違いはありますが、どのような女学校でも学校の勉強だけではなく、文学や音楽、スポーツなど学力とは別のところにもまんべんなくオールラウンドに力を入れてきたところも特徴の一つだろうと思います。ですから、良妻賢母教育という名のとおり家庭生活に必要な知識も教えられていましたが、必ずしもそれだけではなくて、むしろ一般的な教養や常識を身に着ける幅広い教育が行われていたことがわかります。

多くの女学生は国語が好きだったわけですがけれども、その国語好きというのは文学や小説が好きということと繋がっていくところもあったと思います。文学少女という言葉は、今はあまり使われなくなりましたが、戦前には女学生文化を象徴するイメージの一つだったと思います。当時の読書調査など見ますと、女学生が好きな本としてよく挙げられているのは、夏目漱石の『坊っちゃん』や、樋口一葉の『たけくらべ』、それから『レ・ミゼラブル』とか『小公子』、『風と共に去りぬ』といった翻訳本の文学作品であり、文学に中心が置かれていました。

もう一つは少女小説です。明治末から大正期にかけて、『少女倶楽部』とか『少女の友』、『少女画報』、『令女界』といった少女向けの雑誌が次々と創刊されていきます。そこで掲載された少女小説も、女学生にはよく読まれていたようです。なかでも、1916年(大正5年)に『少女画報』に掲載された「花物語」という吉屋信子さんの作品は非常に人気がありました。とくに、昭和14年版の単行本は非常に人気がありました。最初に『少女画報』に掲載されたのは7話分で、いろいろな花の名前のついた短編の物語がつぎつぎに掲載されました。最初の7話が終わった後、全国の読者からどうしても続けてほしい、終わってしまうのは寂しいという投稿がたくさん来て、どんどん続けていくことになりました。最終的に54話まで続きます。これが単行本になったわけです。昭和14年版の人気が出たのは一つには中身が良かったからですが、中原淳一が描く挿絵がファッションナブルなスタイルで、特徴的な大きな目で遠くの未来を夢見ているようなイメージで、これが圧倒的に支持されたといえます。

女学生の読書というのは、日本近代文学と少女小説を柱としたもので、その読み方は男子の教

養主義のように読むべき本というのがあって、それらを称揚することで教養という権威を見つけるというのではなくて、好きなものを好きなように読むというスタイルが一つの特徴だったと言えるのかもしれませんが。

この『花物語』という小説の中には、先生と女学生の師弟関係が描かれているものも結構あります。一つ典型的なものとして「白百合」という短い話の中に出てくる先生と女学生を紹介したいと思います。葉山先生という若い新任の先生と女学生の関係が書かれたものです。葉山先生は音楽の先生で、若くて赴任してきて大人気になって憧れの的になっていきます。主人公の私も、先生にピアノの指導をしてもらっただけで胸がドキドキするというくらい憧れています。ある時、寄宿舎の舎監に「葉山先生の家遊びに行く」と嘘をついて、友達と二人で隣町に映画のポスターを見に行くわけです。ところが、帰りが遅くなって舎監に疑われて、葉山先生に本当に行ったのかと問い合わせをされてしまう。その時の葉山先生の返答は、「自分が引き留めて帰るのが遅くなってしまった」というもので、先生が嘘をついて釈明してくれた。後で先生に出会ったとき、二人は先生をだしに使ったということを恥じるわけです。その時に先生は「偽りの証言を立てたけれど、私はそれを悔いていません。かわいい少女を小さな罪の名のもとに豊かな前途を誤らせずにおきましたから」と言って、もう一つ、「私のこの心を永く忘れないで、魂の純潔、行為の純潔を私に誓ってください。私の大好きな白百合の花言葉の純潔をお互いに守りましょう」と言います。先生の言っている純潔というのは、学校や親が求めているような世俗的な意味の純潔ではなくて、美しいものを感じとって大切に感性とピュアな魂という意味で言っているわけです。舎監や親といった管理者の眼から遮断された世界の中で、お互いを大切に思いながら自分たちの文化を守っている。そういう読書の文化が女学生の文化として共有されていた。この「白百合」の葉山先生と女学生の関係は、立場の違いを前提とした教師と生徒の役割関係というよりも、姉妹のような関係として描かれているというのが特徴だと思います。

実際に女学校では、上級生と下級生の間にエスと言われる独特の親密な友人関係がありました。エスというのは sister の頭文字の s ですが、エスの関係はどちらかが相手に「私と交際してくださいませんか」と手紙を書いて、それが受け入れられたら二人の交際が始まるというものです。その手紙のやり取りの中には、お姉さまとか、かわいい妹へとか、そういう呼びかけがよく出てきます。私は、京都の女学校を卒業した方が大切に保存していた手紙を見せていただきましたが、相手に対する気遣いやいたわり、そういうものが込められた独特の表現で書かれていました。

女学生にとって、女学校時代は、家庭の中での娘という役割からも、そして卒業後に結婚してから妻や母親になる役割からも距離のある状態で保留された、限られた自由な時空間であったと思います。その特別な時空間の中で、女学生たちは、現実の生活や将来から離れて理想の世界というのをつくっていくことができた。葉山先生は、それを象徴する存在として描かれていたのだろうと思います。しかし、感性や純粋さは、初めから備わっている美德という、つまり努力でつくられる成績とは違って家庭で身に着けられる品性というニュアンスを非常に強くもっていることも事実です。

女学生を主人公とした小説のなかには、華美な服装を好む生徒とか、友達や先生の関心をかうためにつぎつぎと贈り物をしたり媚びるような態度をしたりする生徒とか、逆に世知に長けた生徒も出てきますが、そういう生徒は下品だとか卑屈だとかいうレッテルをはりつけられてしまうことがあります。逆に音楽や文学の才能があるとか、立ち居振る舞いが優美だとか、性格がいい

だとかというように、はじめから備わった美質が高く評価される。一方で、成績にこだわり過ぎたり、試験勉強に熱心だったりする現実主義的な生徒はガリ勉といわれてちょっと遠ざけられる場合もあります。確かに家庭の経済的な背景の違いをあからさまに出さないことによって、お互いが平等で慈しみあう関係が担保されるという側面もありますが、一方で、素質や振る舞いの優美さ、感受性などはもともと個人に備わっているようにみえて、じつは大抵家庭の中でたしなみとして身に着けられたものが多いわけです。一見それぞれありのままのキャラを大切にしているようですが、より自然に見える形で家庭の文化的作用の格付けという差異化競争と排除が水面下では起こっていることも知っておかなければならないと考えます。

もう一つ、女学生の文化の特徴としては、学科の勉強や読書以外の課外活動として、あるいは個人的な習い事や稽古事として茶道や華道、ピアノなどもたしなんでいた人が多かったことがあげられます。茶道や華道などの伝統的な稽古事にならんでピアノなども和洋折衷で習う。私の調査では、京都と滋賀の公立学校では伝統的な稽古事が多く、都市部ではモダンな稽古事と両方を習っていました。それから、やり方も和洋折衷で、ヴァイオリンも畳に座って披露するということがありました。女学生の教養というのは、読書をとおした内面形成だけでなく、お稽古事などをとおして身に着けられる芸術の素養や身体作法などを含めた幅広いものだったと言えるのではないかと思います。

女学生文化の特徴は、モダンな教養や男子の教養と重なるものと、伝統的なたしなみの文化、少女小説や宝塚などを好むことを含めた大衆文化、これらのいずれにもかかわるような形で取り込んでいくのが特徴だったと考えます。

女学生は、知的好奇心や興味に沿って文学や美術などの素養を伸ばしていく機会に恵まれていましたが、基本的には家庭婦人をつくる良妻賢母主義がおもての理念になっていましたから、それを職業に結びつけるということはあまり想定はされていなかった。しかし、そのことがすぐに役立つかどうかという実技的な観点だけではなく、人生をどのように経験して味わっていくかという価値を問うことにもつながっていくことでもあると思います。良妻賢母という縛りがあったからこそ、余計にそういう問いが意味を持つ非常に切実なものであったといえると思います。

趣味と礼節と社交というのは、たしなみと非常に近いものでありながら少しずつ違ったものですが、女学生の文化は、楽しむ趣味という側面、礼節規範という側面、繋がり社交という側面が全部合わさった、そういう意味でのたしなみとしての教養であったといえるのではないかと思います。制度がしっかりとしている社会では、たしなみはその制度を内側からしっかりと支える規範になりますから、拘束的に感じたり、窮屈に感じたりすることも多いのかもしれませんが。

しかし、現代のように制度が後退して液状化する、あらゆる関係がフラットになりつつあるような社会では、振る舞いの基準もなくなって、自己中心的に欲望が前に出るということも少なくない。そのなかで、他者とより柔軟に関係を維持していけるような自己抑制と他者への配慮が重なった、やわらかいたしなみとでもいうものが、案外新鮮なものとして求められているのではないかと思います。

したがって、女学生文化は卒業してからも持続されることが多いと思います。単に懐かしい過去というだけではなく、現在も自分を支えて新たに生きなおす糧にもなっているところが大きいと思います。女学校時代の写真や手紙、雑誌の付録まで大切に取っている人も多いです。それはただ思い出としてしまっておくだけではなく、家庭の仕事でいろいろなことがあった時に、それ

を見ると元気が出るものになるものであるということです。ノスタルジアは、過去のある時期への退避というだけではなく、むしろその当時の支配的な価値の中では中心としてあまり見なされず抑圧されてきたものが、懐かしさという感情と共に思い起こされて、それが今現在ポジティブに生きるための意味づけをし直すためのものとして生きているのだと、私は思っています。ですから、女学校卒業生の場合も、卒業後しばらく途切れることがあっても、連絡を取り合って定期的に会ったり、同窓会が主催する勉強会や読書会、サークルに参加して交際を続けていったりすることも少なくありません。これは教養を身に着けなければならないという規範ではなくて、さらには結婚のための教養でもなくて、たしなみとしての教養だから可能なのではないかと、ちょっと強引ですけれども思っています。

最後に一つだけ付け加えておきますと、教育を研究している者としては、学校が持っている教育力や文化の形成力はやはり無視できないものがあつたと思います。確かに男子のため込み型の教養というのは、批判的されるところもあるかもしれませんが、読書が中心ということもあり短期間に努力してたくさんの本を読んでいくことで身に着けられる側面もあることが重要なことだと思えます。努力や勤勉によって達成することが可能だという意味では学校中心的な教養文化ですけれども、だから男子の教養が衰退していくということは、学校の文化形成機能が衰退していくということと、パラレルな部分もあると思います。そのこと自体はむしろ問題として考えなければならないと思います。

それに対して、読書から伝統的なたしなみまで、内面と外面の両方を含む女子の教養文化は、学校だけでなく家庭でも文化資本として身に着けられるところが大きい。そういう意味では、家庭の文化的な背景を表示する機能が強く、それにより包摂と排除が伴うということです。

男子の教養と女子の教養をそれぞれ分けて話しましたが、それぞれポジティブな部分とネガティブな問題のある部分の両方があるということです。

どうもありがとうございました。